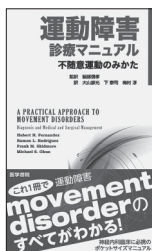


書評

〔評者〕

村田美穂

国立精神・神経研究センターパーキンソン病・運動障害疾患センター長/特命副院長/神経内科診療部長



運動障害診療マニュアル 不随意運動のみかた

Fernandez HH, 他 原著

服部信孝 監訳

大山彦光, 他 訳

●B6変 頁288 2013年

定価 3,990 円(本体 3,800 円+税 5%)

[ISBN978-4-260-01762-6]医学書院刊

「運動障害」って何だろう、と思われる方も少なくないかもしれない。「不随意運動」と聞くと、ああ、震えたり勝手に体が動くことね、でもいろいろあって何がミオクロヌスだか振戦だかよくわからないなあ、というのが多くの方の思いではないだろうか。

ここにご紹介するのは米国フロリダ大学運動障害疾患センターの director の 1 人で米国パーキンソン財団の National Medical Doctor でもある Okun 博士らが、その豊富な経験をもとに「ポケットタイプでありながら、すべての運動障害疾患の症候をベースとした臨床家の頼りになるハンドブック」を書かれたものである。運動障害疾患関連の書籍はわが国でも散見されるが、いずれも専門家向けで手軽に手にとれるものはほとんどない。本書の原著は 2007 年に出版され、世界中で愛読されているが、今回わが国のパーキンソン病診療および研究の第一人者である順天堂大学脳神経内科・服部信孝教授の監訳により、Okun 博士のもとで薫陶を受けた大山彦光先生らが訳された。この名著の日本語版が出版されたことは本当にうれしいことである。

この本は内科的アプローチ、外科的アプローチ、包括的アプローチの 3 章仕立てである。

1)内科的アプローチは症候で分類されて述べられているが、「見ただ目で分類する」という著者の意図をさらに親しみやすくするための訳者の工夫が盛り込まれ、「オドる」患者のみかた、「ピクつく」患者のみかたといった、親しみやすい題がついている。

2)外科的アプローチではパーキンソン病のみならず本

態性振戦、ジストニアも含め、適応、実際のターゲティングのほか、手術をより成功させるための要素、適応評価における集学的チームとして、脳外科医、神経内科医のほか、心理学者(臨床心理士)、精神科医のかかわりにも言及している。

3)包括的アプローチでは非薬物治療として言語療法、理学療法、作業療法、栄養学的アプローチに触れているが、特に言語療法のなかで代表的疾患それぞれにおける言語・嚥下評価に触れているのはほかには類をみないものである。

しかもハンディである。ポケットサイズ厚さ 15 mm のなかに運動障害疾患のみかた、診断、治療まですべてのエッセンスが詰まっている。

もちろん、訳本であるので、薬物の量や考え方に少しわが国との違いがある。原著は 2007 年に出版されているので、少し現状に合わない部分もある。しかし、運動障害疾患患者のケアセンターを作ることに尽力してきた Okun 先生のポリシーが随所にみられ、正確な診断のみならず、考えられるすべての方法を集約し運動障害疾患の患者さんを今よりも少しでもよくしようという気持ちがあふれている書である。

神経内科専門医のみならず、運動障害にあまりなじみのない内科医、神経内科をローテートする研修医、さらには運動障害疾患に興味をもつ看護師、リハビリスタッフにも、ぜひ手元にいつも置いていただきたい 1 冊である。